

# 山形県立河北病院における視覚リハの取り組み

内田まり子（公益財団法人日本盲導犬協会）  
 岸 政彦（山形県立河北病院）  
 原田 敦史（公益財団法人日本盲導犬協会）  
 中村 透（公益財団法人日本盲導犬協会）

## 1. はじめに

公益財団法人日本盲導犬協会仙台訓練センター（以下「訓練センター」）では、東北6県において視覚障がいリハビリテーション（以下「視覚リハ」）事業を実施してきた。中でも、山形県立河北病院（山形県西村山郡河北町、以下「河北病院」）においては講習会をきっかけに数年にわたり継続的な連携を持つことができたので報告する。

## 2. 事業概要

訓練センターの宮城県外における視覚リハ事業には次の2つがある。

### (1) 講習会

#### ・概要

視覚リハを知ってもらうことを目的とし、主に病院において実施する。訓練体験、便利グッズ紹介、福祉機器展示、相談対応を行なう。

- ・費用 無料
- ・実施時間 3時間程度

### (2) 視覚障がいリハビリテーション地域生活サポートサービス（以下「サポートサービス」）

#### ・概要

指導員が自宅等を訪問し、生活訓練を実施する。実施期間は1カ月、訓練時間は1回につき1時間半程度。回数はひとり4回まで。

- ・費用 訓練1回につき1,000円
- ・科目

白杖歩行、パソコン、点字、日常生活動作から希望するものを実施する。

## 3. 山形県における視覚リハ事業

山形県においては、2005年の講習会事業から開始した。初年度は一般施設を会場とし、県内5ヶ所で実施した。

2006年にサポートサービスを開始し、以後、継続している。

2007年、早期からの視覚リハ導入を目指して、一般施設ではなく病院を会場にして講習会を実施することとなった。河北病院でも講習会を開始した。

## 4. 河北病院で行なった講習会の内容と参加者数

### ・2007年

白杖歩行の基礎。白杖の種類、選び方、使い方の説明と練習（病院内廊下、階段で実際に白杖を使い歩行）を実施。視覚障がい者9名、家族・関係機関11名が参加。

### ・2008年

白杖歩行について。屋内・屋外の2グループに分かれて練習。視覚障がい者17名、家族・関係機関23名が参加。

### ・2009年6月

情報提供。山形県立点字図書館、塩原視力障害センター職員による施設紹介と利用方法の説明、便利グッズの紹介、機器紹介のブース設置。視覚障がい者12名、家族・関係機関20名が参加。

### ・2009年9月

盲導犬訓練士による盲導犬歩行体験。盲導犬との暮らしについて説明し、実際に院内で盲導

犬と体験歩行。視覚障がい者4名、家族・関係機関27名が参加。

#### ・2010年6月

訓練体験と参加者交流。白杖、パソコン、日常生活動作訓練の説明と体験、参加者の自己紹介と普段感じていることの話し合い。視覚障がい者15名、家族・関係機関11名が参加。

#### ・2010年9月

盲導犬訓練士による盲導犬歩行体験。盲導犬との暮らしについて説明し、実際に院内で盲導犬と体験歩行。視覚障がい者3名、家族・関係機関13名が参加。

#### ・2010年11月

白杖歩行について。種類、選び方、使い方の説明、基本的な使い方、階段昇降の練習。視覚障がい者7名、家族・関係機関8名が参加。

#### ・2011年10月

眼科ドクターによる医療講演と、白杖歩行の基礎について。ドクターが網膜色素変性症について説明。白杖の基礎的な説明と練習を実施。視覚障がい者15名、家族・関係機関13名が参加。

## 5. 視能訓練士が行なったこと

訓練センターが河北病院の視能訓練士に協力を依頼しようと考えたのは、仙台市内で実施されている「仙台ロービジョン勉強会」で直接会ったことがあるからだ。協力を依頼された河北病院の視能訓練士は、講習会の会場を押さえることだけでなく、参加者を集めることにも協力した。待合室に案内を掲示するだけでは参加してもらえないだろうと、対象となりそうな患者に声をかけ、講習会に誘った。また、医師や看護師にも講習会の意義を説明し、参加するように声がけし、地道に理解されるよう働きかけていった。

さらに講習会の終了後には患者の感想を聞き、要望があれば次回の講習会で実施してみようかと訓練センターに提案した。

また、講習会前後だけでなく、普段の診療での様子から日常生活に不便があるのではないかと感じられる患者には聞き取りをし、必要に応じて講習会や訪問訓練があることを紹介し

た。患者の受診に合わせて指導員が病院を訪問し、相談対応や歩行訓練を実施したこともあった。

上記のような取り組みの結果、講習会においては参加者を集めることができ、ドクターや眼科スタッフにも加わってもらうことができた。また、その後の講習会の内容に患者の意見を反映することもできた。講習会の他、河北病院から紹介されたサポートサービス訓練利用者は2011年までに5名あった。自宅を訪問されてまでは…という患者には受診の時に会ってみようかと視能訓練士が勧め、病院で会って訓練することができたケースもあった。

さらに、視能訓練士の呼びかけによって地域の他の眼科医院からも講習会に参加があった。最初はスタッフが参加し、様子を見てから、患者といっしょに参加するようになった。

視能訓練士としては、初めは病院内で視覚リハビリを行なうこと、患者に視覚リハビリを勧めることには少なからず抵抗感があった。白杖とは全盲の人が持つ物だと思っていたため、どの程度の視能を持っている人にどう声をかければいいのか、とても戸惑った。また、案内をされた患者にとっても、「あなたはもう見えるようになりません」と宣告されたようで不安な気持ちになるのではないかという思いがあった。しかし、実際に講習会を行なってみて、白杖の役割を知り、どんな場合に有効なのかが分かり、練習の様子を見て多くの視覚障害者に対して訓練の必要性があることを認識した。参加者の感想を聞いて、抵抗感が少しずつ減少し、継続して取り組んできたということだった。

## 6. 考察

病院内で視覚リハビリサービスの提供を行なうためには、医療スタッフとの連携が不可欠である。仙台ロービジョン勉強会のように、支援者同士が顔を合わせる機会は重要である。

河北病院における取り組みは、熱心な視能訓練士がいたからという特別な理由で連携がうまくいっていると言える。この視能訓練士の存在がなくては、このような取り組みを行なうことは難しかった。視能訓練士がキーパーソンとな

ったことで、患者にとっては早期からの視覚リハの情報提供、必要に応じて個別対応を受けることができた。遠隔地にある訓練センターにとっては、地域にあるかかりつけの病院に間に入ってもらったことで、スムーズに視覚リハを実施することができた。

視能訓練士は、訓練センターからの依頼がある前から、視覚障がいを持つことになった患者の方々に「何か方法はないのだろうか」という思いを持っていたが、視覚リハを具体的に知る前は、病院で行なうべきことだろうかという戸惑いも大きかった。医療関係者にとっては、視覚リハにネガティブなイメージを持ったり、福祉で行なうべきだからと情報提供などの連携がうまくいかないこともある。まずは医療関係者に視覚リハを知ってもらうことも重要と感じられた。また、訓練センターとしても、現在の講習会の内容では、例えば高齢のロービジョン患

者にとって参加しづらい面があるのではと思われる。どのような内容であれば患者の役に立つことができるのか、普段患者と接している医療関係者の方々との情報交換の必要性を感じている。

## 7. 終わりに

河北病院においては、視能訓練士個人の熱意で現在の取り組みが継続されている。一方、医療の現場では視覚リハそのものがまだ浸透していない状況がある。

今後、他の地域でも同様の取り組みを進めていくためには、患者と同様に医療関係者の方々にも理解を得られるよう働きかけていく必要がある。しかし個人の熱意にだけ頼っては困難な面もあり、何らかのシステムが必要である。訓練センターではそのシステム作りに貢献したいと考え、方法を模索している。